

# 米英が和平交渉を妨害する理由

Gray Zone

SEPTEMBER 27, 2022

## 米英が和平交渉を妨害する理由

(インタビューからの文字起こし)

[US, UK sabotaged peace deal because they 'don't care about Ukraine](#)

<https://thegrayzone.com/2022/09/27/us-uk-sabotaged-peace-deal/>

Jacques Baud (ゲスト)

AARON MATÉ (進行)

## リード

「米国と英国が、ロシア・ウクライナ戦争を終わらせる可能性のあった和平協定を台無しにした」

元スイス情報局員で NATO 顧問のジャック・ボー (JACQUES BAUD) が、その疑惑について語る。

ボーはスイスの元戦略情報局諜報部員で、NATO、国連、スイス軍で安全保障関連の要職を歴任した。

ボーは言う。

「欧米の狙いはウクライナの勝利ではなく、ロシアの敗北だ。問題は、誰もウクライナのことを気にしていないことだ。我々は、米国の戦略的利益のためにウクライナを利用しただけである。いまの戦いは欧州の利益ですらない」

## いくつかの修正

このインタビューのあと、いくつかの修正が必要になった。

\* プーチンは9月21日の演説で、核兵器を使うという明確な脅しはしていない。

彼は、「我が国の領土保全に対する脅威が生じた場合、ロシアと我が国民を守るために、利用可能なすべての兵器システムを使用する」と言明したのである。

\* アメリカは公式には "No First Use "政策をとっていない。

バイデンはたしかに2020年の選挙戦で、"No First Use "の考えを支持すると言った。しかし

彼は大統領選のあとでそれを放棄した。

つまりバイデンが選挙戦での姿勢を覆したのであって、"No First Use "が米国の公式な政策であったことはない。

## 以下本文（会見の文字起こし）

（小見出しはAALA ニュースによるものです）

### 1．予備役招集の理由

メイト： 本日はポーとの会見です。最初に伺います。

プーチンが侵攻をエスカレートさせ、約30万人の予備軍を召集し、ロシアの領土保全が脅かされれば核兵器を使用すると脅しました。このことについて、どう思われますか。

ポー： まず表現上の問題で注意しなければならないことがあります。核兵器については、後で具体的に説明します。

まず「部分的な動員」の話から始めましょう。それには中長期的な意味があり、論理的な解釈が必要です。

それはウクライナ南部のドンバス地方、つまりケルソン州、ザポリジャー州、ドネツク州、ルガンスク州で行われる住民投票に続くものです。

もし、住民投票でこれらの州がロシア連邦に加盟することになれば、ロシア連邦の国境が1000km近くも進出することになります。

「新領土」では現在戦争が起きているわけですから、安全を確保するために新たな軍隊が必要になります。ですから、私としては、現在の状況に対して追加的な兵力が必要であることは、別に驚くことではありません。この

30万人の動員兵は必ずしも前線に出るわけではなく、ウクライナ南部に展開する部隊を支援するために動員されることとなります。

つまり、基本的にはウクライナ南部の治安を維持し、ロシア軍の移動の自由を確保するためのものです。住民投票が成立した場合は、至極合理的な措置だと言えます。

なぜ受け入れられるかという点、2つの理由があります。

ひとつは、この夏、ウクライナ政府が住民の退去を命じたことです。だから現在これらの州にいるのは、おそらく親ロシア派の人々ばかりです。つまり、ロシアへの加盟を受け入れる人が大半を占めているのです。

もう一つは、2014年以降、ウクライナの南部の人々が、あたかも占領下にあるように感じているということです。特に言語に関する法律がそうです。南部には、西側では誰も話題にしない法律がいくつかあります。その一つが2021年7月に採択された有名な「先住民の権利に関する法律」です。先住民とは「ウクライナ語を話す生粋のウクライナ人」ということです。この法律によると、ウクライナの「先住民」は、ロシア人とは別の権利を持っているとされます。

この法律は、1935年にナチス・ドイツが制定した悪名高いニュルンベルク法と類似しています。すなわち民族的出自によって国民に与えられる権利が異なるというものです。

そのため、2014年以降、特にここ数年、ウクライナのロシア語圏の人々は普通の市民とは言えなくなっています。彼らは二級市民なのです。

これらの条件が重なったことから、残留住民は現状に満足しています。だから2月以降ロシア軍に占領された地域で抵抗運動が展開されることはありません。それどころか実際、住民はロシア人の到来を好意的に受け入れています。

この2つの理由のため、住民投票はおそらく受け入れられ、ロシア連邦がウクライナの南部に支配を広げる可能性が高いでしょう。

## 2. 核兵器使用の可能性について

さて、核兵器についてですが、欧米のメディアはすべて、プーチンが核兵器の使用を脅かしたと述べています。これは間違いです。プーチンが実際に発言した内容を精査すると、彼は核兵器を使用するとは言っていません。たしかにプーチンは核兵器について言及していますが、それは西側諸国の指導者がロシアに対して核兵器を使用する可能性を論じたものです。具体的にはイギリスの首相であるリズ・トラスが述べたことを。

(以下、他番組の放映内容の紹介)

ジョン・ピーナー (タイムズ・ラジオの司会者) : ...それから、あなたはナンバー10の部屋に通されます。そこで最高機密裏に、あなたの目の前に一通の命令書が置かれます。それは「最後の手段」と呼ばれる、トライデント艦長への命令書です。

その時リズ・トラス首相が核兵器の発射命令を出せるでしょうか。その命令は地球滅亡を意味します。

ボタンを押すかどうかは尋ねません。首相としては「イエス」と答えるでしょう。でもその仕事に直面したら身体がすくんでしまうかも知れない。そのことを想像したら、あなたはどう感じるでしょうか？

英国首相 リズ・トラス : それは首相の重要な任務だと思います。その覚悟はできています。

[拍手]

ジョン・ピーナー : 覚悟ではない。どう感じるかを聞いているのです。

リズ・トラス : 準備はできています (I'm ready to do that)

.....

ポー : 彼女は8月末にロシアに対して核兵器を使用する用意がある、ロシアに対して核戦争を始めることは正当化されると発言しています。これはロシア人にとって恐怖を煽られる発言です。

ロシア側は、核兵器について先制不使用の方針をとっています。いまでも、今後も、その方針から逸脱することはないと思われず。

ここで思い出していただきたいのですが、アメリカは今年の4月まで先制不使用の政策をとっていました。

しかし、ジョー・バイデンは今年の4月初旬にその政策を撤回し、今ではアメリカは先制使用政策をとっています。

...米国はいま、先制不使用政策ではありません。米国は核兵器を最初に使用することができるのです。これはアメリカの戦略上まったく新しいものですが、そのことには誰も触れていません。

プーチンが核戦争の危険性を強く主張する理由もそこにあるのです。

使用する兵器についてですが、彼は核兵器の使用については全く言及しませんでした。

彼は他の兵器について言及しました。それは西側が持つ対弾道ミサイル防衛のほとんどを撃破できる極超音速ミサイルのことです。彼はそれを使用すると脅したのです。

ごく最近、ロシアが新型ミサイル「サルマット」を公開したことを思い出してください。これは世界で最も強力なミサイルの一つで、一基のミサイルから独立した誘導弾を数発発射でき、世界のほぼすべての地点に到達することができます。

プーチンの発言には、おそらく狙いがあるのでしょう。つまり、西側諸国が核武装を望むなら、適切な対応策を持っているが、必ずしも核による対応策ではないということです。

ロシアは、核武装に頼らなくても、ほかに十分な対抗手段を持っているのです。

メイト：　そこで、バイデンの政策ですが、バイデンが今年初めに出した防衛見直し戦略での

「核体制の見直し」についての見方はそのとおりだと思います。

それによると、米国は「米国またはその同盟国やパートナーの死活的利益を守るための究極状況においてのみ、核兵器の使用を検討する」となっています。

これは、米国は核兵器を先制使用する可能性を述べたもので、「先制不使用」を後退させるものですね。その通りですね。

中略

### 3．占領地域での住民投票について

メイト： 続いて、ウクライナの4つの地域で行われている住民投票についてお尋ねしたい。

この住民投票でロシアへの加盟が決まるとすると、ロシアがこれらの領土を手に入れるのは当然の帰結なのではないでしょうか。

それとも、プーチンは住民投票の票を交渉材料として使い、基本的に西側諸国に対して次のように言う可能性はないのでしょうか。

「私は、ウクライナの中立をふくむミンスク合意の履行、そしてクリミア半島のロシア帰属などを受け入れるなら、これらの領土を併合するつもりはない。この投票結果を受け入れることはない」と。

その根拠は、過去8年間、ロシアとプーチンがドンバス地方の独立を認めなかったからです。彼はアメリカとウクライナにミンスク合意を履行させようと努力していたのです。

では、プーチンが以下のように言っても、未だ遅過ぎることはないのでしょうか。

「もしあなたがミンスク合意あるいは類似の和平合意を受け入れ、和平に応じ、我々の安全を保証し、ウクライナがNATOに加盟しないことを確認するなら、私は住民投票の結果如何に関わらず、これらの領土を併合したりはしない」

ポー： そうですね。この住民投票についてはもう少し具体的に説明すべきでしょう。

ドネツク州とルガンスク州は、ある意味ではすでに独立しています。彼らにとって今回の住民投票は独立することではなく、ロシアに帰属するかどうかということなのです。

他の2つの州、ケルソン州とザポリージャ州は、正式にはまだウクライナに属しています。従って異なる質問をすることになります。

まず、ウクライナから出たいのか、そうなのか、そうでないのか。これが最初の質問です。

次に、ウクライナから出たいなら、独立したいか、イエスかノーか？ そして、独立したいのであれば、ロシア連邦に加盟したいのか、イエスなのかノーなのか。こういう順番になります。

その上で、あなたの質問に直接触れることとなります。すなわちロシアが「返還」を受け入れるかどうかということです。

しかしザポリジャーやケルソンの住民がウクライナに戻るとは思えません。住民は返還を望んでいないでしょう。ロシアに協力した住民はウクライナによる報復の可能性を恐れているからです。

つまり、現在ロシア連合に占領されている地域は、いかなる形でもウクライナに戻るとは思えません。独立するか、ロシアに合流するか、どちらかになるのではないのでしょうか。

#### 4 . 米英諸国が潰した和平合意

メイト： ウラジーミル・プーチンの演説で、アメリカではほとんど注目されていない点があります。例えば、ワシントン・ポスト紙のコラムニストであるデイヴィッド・イグナティウスが2回ほど言及しましたが、それ以外は無視されています。

プーチンは、3月にウクライナとロシアが和平合意に非常に近づいたと発言し、これを初めて公にしました。しかし、プーチンの言葉を借りれば、ウクライナはいかなる妥協も台無しにするよう誰かに命じられたのです。

以下はプーチンの発言です。

特別軍事作戦の開始後、初めて公の場で、イスタンブールでの交渉でも、ロシアの安全保障に関する我々の提案に非常に前向きな反応がありました。

しかし明らかに、西側諸国はこの平和的な決断に満足していませんでした。そこで一定の妥協に達したように見せかけたあと、事実上、交渉を台無しにする直接の命令を下したのです。

(引用 以上)

引き続きメイト： このプーチン発言について詳細をご存知でしょうか？

ところで、元ホワイトハウスの専門家であるフィオナ・ヒルも最近、フォーリン・アフェアーズ誌で次のように述べ、このことを裏付けています。米国当局は、ウクライナとロシアの間に和平合意という線があることを知っていた。

それは基本的に、ロシアが侵攻前のラインに戻ることに、その代わりにウクライナは中立を宣言し、ウクライナのロシア語圏の特定の地域のロシアの支配を認めること、そしてウクライナは西側から安全保障を受けることを前提にしていた。

しかし、プーチンの発言やウクライナのメディアで報じたこれらの合意を、西側諸国が支持しなかった、とヒルは省みた。

ポー： 実際は、ロシアとウクライナの間では、これまで3回の合意が試みられています。

最初の試みは、2月25日、つまり攻撃開始のちょうど1日後に、ゼレンスキーの要請で始まりました。ゼレンスキーがロシア側に交渉してくれと言ったのです。

こうしてベラルーシとの国境で始まった最初の交渉は、実は、EUによって止められたのです。

欧州連合は、ゼレンスキーが要請した2日後に、最初の武器パッケージを携えてやってきました。それは4億5千万ユーロの兵器パッケージで、プーチンとは交渉すべきではなく、とにかく戦うべきだという考えでした。

3月にもまったく同じシナリオがありました。ゼレンスキーがロシア側に停戦を提案しました。その2日後に、EUがまた最初のとくとまったく同じことをやってきました。

EUはまたもや5億ユーロの武器提供という2回目のパッケージを携えてやってきました。

それに加えて、英国のボリス・ジョンソン首相がゼレンスキーに電話をかけて、申し出を撤回するように、さもなければすべての支援を打ち切ると脅しました。

ボリス・ジョンソンは数日後にキエフにやってきて、同じことを繰り返しました。

間違っているかもしれませんが、彼は武器に関する新しい提案をしてきたと思います。

私の本では、ウクライナの情報源にしか触れていません。これはプーチンの党派が西側に向けてでっち上げたものではありません。

ウクライナの情報源は、ボリス・ジョンソンと西側諸国が和平合意を妨害したと明確に述べているのです。ウクライナ人もそう感じていたのです。



8月にリヴィウで行われたエルドアン大統領とゼレンスキー氏の会談で、3度目の出来事がありました。

ここでもエルドアンは、ロシアとの交渉の仲介を申し出たのです。

その数日後、ボリス・ジョンソンが突然キエフにやってきて、あの有名な記者会見ではっきりとこう言ったのです。

「ロシア人とは交渉しない。我々は戦わなければならない。ロシア人とは交渉の余地はない」

つまり、西側は3度にわたってロシア側との交渉を妨げたのです。

そして4月には、おっしゃるとおり、おそらくゼレンスキーによる最も具体的な申し出がありました。

これは非常に包括的な提案で、ウクライナの中立と、ロシアを含む外部勢力の監督下での軍隊駐留を含んでいました。

つまり、非常に広範な合意であり、ロシア側はこの合意について非常に肯定的な態度を取っていました。

しかし、やはり先には進まなかったのです。

理由は明らかです。リンゼイ・グラハム上院議員 (R-SC) も記者会見で、

「ウクライナ人は最後のウクライナ人まで戦わなければならない」と言いました。

以下、グラハム発言の引用

開戦から4ヶ月が経ちましたが、私はこの戦争の構造的な道筋が気に入っています。必要な武器と経済支援をする限り、ウクライナ人は最後の一人まで戦ってくれるでしょう。

(ポーの発言に戻る)

だから、問題はウクライナの勝利ではない、という力学にあると思うのです。

ロシアを倒すこと。欧米が目指しているのは、まさにそこなのです。

それが私を悩ませることであり、私が本の中で述べていることでもあるのです。

## 5 . 問題は、誰もウクライナのことを気にしていないこと

問題は、実は誰もウクライナのことを気にしていないことです。

ウクライナ問題は、アメリカの戦略的利益の道具化したものです。それはヨーロッパの利益ですらありません。いまエネルギーと経済の危機が顕在化しています。ヨーロッパ人はこの紛争にまったく関心を持っていないのです。

この紛争は、むしろアメリカの利益に資するものです。まともに考えて、アメリカの真の利益になるとは思えませんが、ホワイトハウスは本気でそう考えているようです。

最初の戦略は、ロシアを戦争へと挑発し、これに制裁を課すことによってロシア経済を破壊することでした。問題は、この制裁がうまくいかなかったことと、ウクライナがそれほど長く戦うことを想定していなかったことです。ウクライナは、「戦いはすぐに終わり、ロシアがあっという間に崩壊する」と思っていたのです。

2019年3月のオレクシイ・アレストヴィッチのインタビューを見ると、まさにその通りです。彼はゼレンスキーの顧問であり、非常に親しい友人です。

2019年3月にゼレンスキーが当選する直前、インタビューの中で、彼は「ウクライナはロシアと戦争をする、ロシアを倒すことを目的にする」と言っています。ロシアを倒すことがウクライナのNATO加盟の切符になるのです。

そして、このロシアとの戦争は2021年から2022年にかけて起きるとまで言っています。

つまり、これは絶対に計画的なものであることが明らかになったわけです。

ロシアはあっという間に崩壊し、長期の戦争は起きないだろうと考えられていました。しかし今日、私たちが目撃しているのは、ロシアが崩壊せず戦い続けているという事実です。この誤算の犠牲者はウクライナ自身です。

今、西側はこの紛争を推し進め、軍事的のみならず政治的にもロシアを弱体化させようとしています。

紛争の長期化によってはどんな目標にもつながりません。なのに、ただ政治的にロシアを弱体化させようとするのです。そうして何の成果もなく、制裁に制裁を重ねているのです。

西欧諸国は実際、その中で自らの誤算の犠牲者となっているわけです。これはウクライナにとって非常に不幸なことです。それが現実です。

## 6．ロシアは今後どう出てくるのか

メイト： 最近ニューヨークタイムズでも珍しいことに、米政府高官の発言を引用している。その高官は「ウクライナにとって最悪の事態がまだ来ない」と認め、先行きを懸念している。彼らはそれでもまだ、同じ政策を続けています。

以下ニューヨークタイムズからの引用

「最も危険な瞬間はまだ来ないと懸念を表明するアメリカ政府関係者もいる。なぜならプーチンは西側諸国を刺激する戦闘激化を避けているからだ。彼は重要なインフラのみを破壊し、政府関係の建物攻撃に限定するなど、対象を自制している」

引用終わり 以下メイト発言に戻る

ニューヨークタイムズの別の報道ですが、西側当局はプーチンがこれまで戦争の激化を避けてきたことにとまどっています。ウクライナのインフラを破壊する試みは非常に限られています。

それはアメリカとは対照的です。例えばアメリカがイラクに行ったとき、最初に狙ったのはインフラです。

アメリカはイラクに侵攻した際、真っ先にインフラを攻撃しました。給水所や橋などです。ロシアはそのようなことはしませんでした。

しかしそのことは置いて、今お聞きしたいのは別のことです。この7ヶ月の間に、ロシアはもうグローブを脱ぐとお考えですか？

それとも逆に、ロシアの侵攻は、ウクライナのインフラに対してより残忍で破壊的なものになるのでしょうか？

ポー： 私はロシアがより破壊的になるとは思いません。ロシア人の目的は明確に定義されています。そのことを忘れてはなりません。

それはドンバスの非軍事化と非ナチ化でした。非ナチ化についてはマリウポリ占領（アゾフ軍団の殲滅）によって完了しました。残された目的は住民に

対する軍事的脅威の排除です。つまり、ドンバスを脅かす勢力を破壊することです。

今まさにバフムト、チョルノモルスク、スロビアンスク地域で、それが行われているのです。

彼らは、ウクライナを占領し、ウクライナの領土を奪い、ウクライナを破壊し、ウクライナの政権交代を誘発することを計画したわけではありません。彼らは決してそんなことは言っていません。

「ロシアのウクライナ侵略」は西側諸国では引用符で定義された目的です。しかしロシア側は決してそうは言わなかったし、そのつもりもしなかったのです。

実際、ある時期までロシア人はゼレンスキーに満足していました。ゼレンスキーは、ロシア側と交渉し合意することを公約して当選した人物であることを忘れてはなりません。

だから、ロシア側は基本的にゼレンスキー自身には何の敵意もなかったのです。

問題は、ウクライナの極右勢力が、ゼレンスキーを身体的に脅かして、ロシアと取引することを禁じたことです。

そして、私たちが言うように、西側諸国は、実際、ロシアと交渉しないようにゼレンスキーに圧力をかけたのです。

この事件の究極の目標は、実は、2019年のランド社の出版物に書かれているのです。

すなわち、ロシアをアンバランスにすること、ロシアを過剰に拡張すること、タイトルは正確に覚えていませんが、ランド・コーポレーションの2つの出版物です。

これらの書物に書かれていることが、まさに今起こっていることの説明になっています。アゼルバイジャンとアルメニアの問題、フィンランドとスウェーデンのNATOへの加盟、すべてがそこにあるのです。

つまり、少なくとも2019年以降のアメリカの目的は、言ってみれば、ロシアを孤立させること、国際社会からロシアを孤立させることそのものなのです。

それが彼らのやっていることなのです。その目的のためにウクライナを悪用しているだけなのです。

## 7. 戦闘はいつまで続くのか

メイト： この戦争について、長期的な見通しはいかがでしょうか。この戦争は冬の間も続くのでしょうか。すでにエネルギー配給の話もあり、人々は高いエネルギー代に不満を抱いています。

ポー： 正直なところ、私は水晶玉を持っていないので、何が起こるかを正確に言うことは難しいです。しかし、その答えになりそうな要素はいくつかあります。

中略

もし住民投票が、現在の占領地域のみを対象とするものであれば、やがて前線が固定し、交渉の可能性が開けるかも知れません。

その際、占領地域のロシア化は不可逆性のものとなるでしょう。重要なことは、どんなことがあっても、これらの地域がウクライナに戻ることはあり得ないということです。

なぜなら、これらの住民はキエフの支配下で苦しんできたし、今は少なくとも独立する機会があるからです。たぶんロシアの下に。それはウクライナ側も承知のことと思います。

第二の側面は、言ってみれば西欧諸国の動きです。それは今後数カ月間にヨーロッパが直面する社会的・経済的状況に大きく依存します。すでにいくつかの研究機関、情報機関が、過去3カ月間に欧米で抗議行動の数が42%増加したことを指摘しています。今後数カ月で社会不安はさらに高まると予想されます。

メディアが全く沈黙しているため、この騒動についてあまり聞かされていません。

非常に興味深いのは、例えばオランダでは農民が何カ月もデモを続けています。農民のピケットにより国中が封鎖されています。農民と警察の間には大規模な衝突があり、農民に対して実弾射撃も行われました。極めて重大な事件でした。

しかし、主要メディアはそのことに触れていません。私が住むベルギーでも、メディアは一度も触れていません。

イタリアでも同じようなデモがありました。政権が交代したら、極右政党が登場するかもしれません。これは良い兆候ではありません。しかし当然の帰結といえはそのとおりです。

イギリスやエストニア、ブルガリアでも同じことが起こっています。

いまヨーロッパ社会では非常に困難な時期に差し掛かっています。それがヨーロッパ人の行動に影響を与えている可能性があります。

欧州委員会のウルスラ・フォン・デア・ライエン委員長は最近、記者会見で「ウクライナに和解はない」と発言しました。つまり、彼女はロシアとの交渉はしない、ロシアに対して断固とした強硬姿勢で臨もうとしているわけです。

西欧諸国では、ウクライナ情報はすべて、ウクライナのプロパガンダによるものだと言ってよいでしょう。犠牲者の数、事件などすべてです。

アメリカではどうでしょうか。

たとえばニューヨーク・タイムズ紙には、ウクライナとロシアの間の和平合意、これらの経過が紹介されています。

しかしフランス語圏の主要メディアではまったく触れられていません。ヨーロッパでは、ロシアが負けている、人的損失はロシア人であると決めつけられているのです。

ウクライナの犠牲者については決して言及しません。したがって、人々はウクライナが勝利から勝利へと向かっていると感じているのです。しかし、現実とはまったく違います。

この問題に加えて、経済的な問題もあります。戦場で死んだ人々、ヨーロッパに移住した人々、ポーランドやロシアなど世界の各地にいる人々、これらの人々がウクライナ経済から欠け落ちたのです。

人材やノウハウ、仕事をする人がいなければ、どうやって経済を実現できるのでしょうか？

脆弱化したウクライナは、それだけ余計にエネルギー危機やインフレなどの影響を受けます。ウクライナの経済的見通しは非常に厳しいのです。

ハンガリーのヴィクトル・オルバンは制裁をやめ、ロシアとの関係を少し緩和することを提案しました。このように、ロシアとのコンタクトを改善する方向に向かう声も出ています。

しかし、オルバンに対する欧州連合からの回答は、ハンガリーに対する欧州の支援として受け取るはずだった 75 億ユーロの凍結でした。

つまり、今のところ、ヨーロッパは議論の扉を開くことに非常に消極的です。しかし、おそらく今後数ヶ月のうちに、社会情勢の圧力によって、変化が起こるかもしれません。

私が感じているのは、ロシアは全体的に極めて合理的な行動をしているということです。彼らは各々の事情に一線を画し、それに従って行動する。そしてその行動は我々がきちんと判断すれば、ほとんど予測可能です。

しかしヨーロッパ側に立てば、これはまったく非合理的なことです。ドイツの外務大臣であるアナレナ・バーボック (Annalena Baerbock) は、こう言います。

「私の政策についてドイツ人がどう思おうが関係ない。私の目的はウクライナ人を支援することだけだ」

このように非合理主義の立場に立てば、合理主義が非合理的に見えるのです。

(以下バーボック発言の引用)

ドイツの有権者がどう思おうと、私はウクライナの人々に思いを届けたいのです。

だから私にとっては、率直であることが重要です。私のすべての行いは、ウクライナが私を必要とする限り続きます。それを明確にしなければなりません。

私たちは冬の時代を迎えています。人々は街頭に出て、「ガス代が払えない」と言うでしょう。私は「はい、わかっています。だから社会対策費で助けるんだ」と言うでしょう。

でも、「じゃあ、対ロシア制裁を止めます」とは言えません。

我々はウクライナに寄り添い、本当に厳しくなっても、冬の時代であっても制裁は続けます。

(引用終わり ボー発言の再開)

バーボックは選挙で選ばれたのに、国民がどう思うかなんて気にしていない。自分の目的だけを考えている。

つまり、ある種の非合理性の中に存在しているのです。こういう人達を相手に実質的な、根拠のある予測をすることは非常に難しいのです。

私は今よりも良い方向に向かうことを願っていますが、正直なところ、少し悲観的な気持ちになっています。

というのも、ヨーロッパの政治家は「よし、もうやめよう、考えよう、全部を見直そう」と言わずに、むしろアクセルを欠けているのです。

それは絶対に違う。実際、私たちは間違った決断のスパイラルの中にいるのです。

メイト： 元スイス情報局員で NATO 顧問、『オペレーション Z』の著者でもあるジャック・ボーさんに伺いました。この本は現在フランス語で出版されていますが、まもなく英語に翻訳されます、ありがとうございました。